記事入力：2016/01/27 09:35

朴裕河教授「『売春』表現使う学者は少なくないのになぜ私だけ?」

挺対協の姿勢を批判
「支援団体を批判したから訴訟起こされた」

G+1 0 ツイート いいね！ 4 B! 0

著書『帝国の慰安婦』で従軍慰安婦被害者の名誉を毀損(きそん)したとして起訴された朴裕河(パク・ユハ)世宗大学教授(59)が「『帝国の慰安婦』は20年間にわたり戦争犯罪だとばかり語られてきた慰安婦問題を帝国主義の問題として解き明かしたものだ」と強調した。

朴教授は26日午後、ソウル市広津区内の飲食店で記者懇談会を開き、『帝国の慰安婦』を出版した趣旨について「慰安婦問題がなぜ20年間解決していないのか、日本が何をして何をできなかったのか、すべての人々に伝えたいと思った。(慰安婦問題を)大きな枠組みで帝国主義の問題として見つめ、日本にきちんとした責任を問わなければならないと考えた」と説明した。

「そのためには朝鮮の慰安婦とは果たしてどんな人物なのか根本に立ち返って考える必要があった」という朴教授は「これまで聞こえていなかったおばあさん(元慰安婦)たちの声を聞く必要もあった。総体的に聞いて判断し、慰安婦問題を解決するため努力すべきだと考えた」と語った。

そして、「私が会ったおばあさんたちの中には『強制連行はなかったと聞いている』と証言した方もいたし、支援団体の運動方式に対する認識が私と一致しているケースもあった。このようなおばあさんたちは顔や声が公開されることを嫌がった。なぜそうなのかを韓国人は考えるべきだ」と指摘した。

『帝国の慰安婦』で朴教授は「自発的な売春婦」という言葉を使って問題になっているが、これについては「日本を批判する脈絡で、日本の書籍を引用したものに過ぎない」と説明した。

朴教授は「売春という表現については使っている学者がかなりいる。それにもかかわらず、私だけが告発されたのは(慰安婦)支援団体を批判したためだ。売春かどうかにこだわるのはおばあさんを抑圧することだと思う。近代国家システムが性を必要としながら抑圧し、法で保護していないことが根本的な問題だ」と主張した。

その上で、「支援団体は苦労して多くの努力をしたが、支援団体がおばあさんたちの言葉を代弁し、代弁する人々が望む方向ではかり解決をしようとしているのは残念だ」と慰安婦支援団体に対する失望も口にした。

そして、「おばあさんたちの考えだとされているのは代弁人たちの考えだ。今の訴訟が代弁人たちの考えと私の考えの対立なら構わないが、まるでおばあさんたちと私の対立のようになっている。おばあさんたちを攻撃している形になってしまっているのがつらい」と訴えた。

NEWSIS／朝鮮日報日本語版

＜記事、写真、画像の無断転載を禁じます。 Copyright (c) The Chosun Ilbo & Chosunonline.com＞

関連ニュース